



和漢連句
 後山
 宗

田

保
1725
1

四
三

伊地知文庫
文庫20
60



伊地知氏書冊

何路

二條園白殿



依保娘乃

聲やけけのふわとせ

あすこころしれを眺むる廣くも
杉原の雪乃ふ雪よまを
阿比の枝端をぬいれん
そら^{そら}のまは^まの^のま^まの^のま^ま
らんや音の糸なる
舞れ末雪れはるや
世にあく風をこらぬ

雪のふらこを
所こ^この^のま^まの^のま^ま
雪も^もの^のま^まの^のま^ま
こ^この^のま^まの^のま^ま
そこ^この^のま^まの^のま^ま
文お^おの^のま^まの^のま^ま
世^世の^のま^まの^のま^ま

君のいぬと
きりぎりすの
柳乃糸を
箸なれ
くささか
響らね
をき

降らるる
をた
何を
い
つれ
うね
つ

おねりよあはれ 津よ 文よ 言
影おくは人よ 夕日の小窓を
あふふは 留すの 一の糸
たうとあうさの 世路お月おこ
んや ちかちか ちうた 古さと
雲ちかちか ちかちか ちかちか
何と云ふて みる 村さち

音もあはれ 津よ 文よ 言
影おくは人よ 夕日の小窓を
あふふは 留すの 一の糸
たうとあうさの 世路お月おこ
んや ちかちか ちうた 古さと
雲ちかちか ちかちか ちかちか
何と云ふて みる 村さち

あまのこみ 五月 ぬのさ
又ならぬ 雲をひく さらさら
まご 祈り 雲雀をらと 舞ぬ
こゝろを ちり 雲のみり 流井うも
それと たらりの 及び 雲を
下生 ぬの だら ちり 雲を
流を ちり 雲を 流す さら

みり 人なり 雲に さら
たりの 雲を 流す
あまのこみ 雲の 流す
たりの 雲を 流す
吹く 風を 流す
さら 流す
陸奥乃 流す

あつて
うらこれ末の道れ
まをけハ羊に限りの
毛も由たすりの
月なき神のさ
手もあまてしにも
冬も禊なる
にりあまも似ぬ
まをけハ羊に限りの
毛も由たすりの
月なき神のさ
手もあまてしにも
冬も禊なる
にりあまも似ぬ

心されと松もや
たうとすあし
雷に作らる
まをけハ羊に限りの
毛も由たすりの
月なき神のさ
手もあまてしにも
冬も禊なる
にりあまも似ぬ
まをけハ羊に限りの
毛も由たすりの
月なき神のさ
手もあまてしにも
冬も禊なる
にりあまも似ぬ

好き若き鳥のおかしうてぬ
おま^上や^鳥この山風好まて
月もあす来の夜はおき縄
手^尾さうそあまぬ国をよも越
うさうくもや夜乃何をも
松原のまじりた花燈
あゝ尾のきれきしあゝぬの

山川や流るるをすはらし
のりまはるるの心 浅きよ
武士の泊れあゝあけう
いぬもあゝこのせく乃夜粘
百^{やい}安の目次乃^執ふえを 夜
あまのえささなはし心の下葉
露^拂柳そとや柳のそと夜

音のよまれ響のよほりね
右のよ響も月の影も
さうすびこをよ屋形尾の響
体ぬやこすけの糸をたのひ
そととたうそちうくんおんこを
深響て袖をくのうり
らきやうらりの響もよ響

雪うりもこゑのよれ響も
何えしう響のつをきかた
映も深もこゑのよ響
何まこの響もよ響
何まよ響もよ響
何まよ響もよ響
何まよ響もよ響
何まよ響もよ響

福討を始末法代の巻持

此百頁二条良基らの梵阿し百頁ト
四十二ヶ条合テ全録すまきん

右 百頁 子とありん

口 寛永九年七月 返り子のおる
校合別ニ 柿阿百頁 四十二ヶ条

明應八年之月四日
和漢之連句

明應八年三月四日會

和漢

乃生之反者古音格也

夢意國師

北堂風 別 駐春

竺山

五絃 琴 轉調

無極

六律 曲 成文

乾峯

池館 觀 魚樂

鑑海

山房四十一客来一

悦一臺

君羊賢今日會一

竺山

道一外一予一下一亦一不一

廣秀

様一衣一と一う一束一い一さ一ふ一て

能一重一

卷一と一雲一行一袖一輕一

妙一讓一

一竹耶一十萬一雪一

竺山

短笛兩三一ふ一了一

晦谷

秋の多一い一ふ一子一の一あ一ら一ん一 羨一忘一

沙一砌一雙一虫一咽一 無一極一

松一梢一孤一鶴一翹一 喜一山一

新一衣一も一流一り一ぬ一之一山一流一子一 廣一秀一

晴一欄一僧一晒一背一月一 鑑一海一

陋巷_ニ 永安_シ 身_ヲ
 瓢飲_ニ 生涯_ニ 足_リ
 絃歌_ニ 壯節_ニ 高_シ
 風_ニ 和_ム 杵_ノ 音_ヲ
 消_テ 閑_ヲ 興_ヲ 有_リ 餘_リ
 珠璣_ニ 隨_テ 咳_ニ 落_ル
 錦_ノ 綺_ヲ 為_シ 文_ヲ 裁_ス
 有_リ 苑
 極_ニ 溪
 晦_ニ 谷
 磨_ク 考
 妙_ニ 讓
 竺_ノ 山
 無_ク 極
 無_ク 極

一_ノ 諾_ス 直_ニ 千_ノ 金_ヲ
 一_ノ 諾_ス 直_ニ 千_ノ 金_ヲ
 一_ノ 諾_ス 直_ニ 千_ノ 金_ヲ

疾_ノ 月_ノ 風_ノ 何_ト 生_キ 上_ニ 杉_ノ
 納_レ 涼_ヲ 狂_ニ 蓬_ノ 松_ノ
 茶_ノ 甌_ニ 調_ニ 雪_ノ 乳_ヲ
 丹_ノ 竈_ニ 鍊_ニ 霞_ノ 光_ヲ
 換_レ 骨_ニ 仙_ノ 家_ノ 藥_ノ
 絕_レ 塵_ヲ 驛_ノ 路_ノ 鞭_ノ
 妙_ニ 讓
 無_ク 極
 方_ノ 外

傳ツ 美ツ 梅 一 朶
普 明

分ツ 月ツ 水 千 枝
龍 湫

潤ツ 物ツ 恩 波 廣キニ
鏗 蒼

燒ツ 推ツ 蕤ツ 下 根 竹 子
廣 秀

原 野 草 鋪 茵ツ
竹 二 山

以ツ 月ツ 社ツ の 友 と 知 る 色
能 重

點ルキ 塵ラ 一 爐 香
鏗 蒼

風 鐵 時 語
竹 二 山

水 車 處 鳴ル
有 竹 乾

世 平 民 讓 畔ツ
無 極

路 遠 客 思 家
乾 峯

縮スレ 地ツ 多 無 術
竹 二 山

延レ 年 可 有 方
鏗 蒼

采 好 山 子 心 と 誓 め 了
夢 忘

杖打
此句出

松風の音

師直

後まきし梅の枝

廣秀

古渡舟何人

夢窓

修途馬何

有竹紀

越山や

無極

月影して竹の

安藏

夢窓

竹の

禪人從定立

竹山

騷客練詩吟

無極

梅の

廣秀

能書

普明

乾峯

竹山

天邊雲幕垂

風裏竹簾垂

出迷鳥

虹 横山雨外 普明

夕 初 夢忘

之 初 妙讓

秋 林 錦 一機 龍 漸

吳 江 風 正 冷 竹 山

胡 地 雪 常 深 古 竹 紀

何 水 少 亦 妙 讓

破 苦 の 名 の う 妙 讓

披 雲 坐 石 僧 乾 峯

忘 身 天 地 潤 方 外

彈 指 古 今 遷

ふ 又 明 の 夢 忘

幾 看 滄 海 枯 竹 山

庭 夢 忘 廣 考

交 言 須 有 信 鏡 函

德以豈無仁 古先
 民草仰天澤 普明
 士井田國風 青山
 春 存心子也 好之 羨忘
 烟 柳 展眉 晦谷
 醉 惠 頻 蹙 事
 老 作 退 藏 謀
 種 豆 屋 餘 地 方 外

外 雨の少 子 輪 糸 子 以 夢 忘
 鉢 貯 天 香 飯 竹 山
 壁 遺 魯 古 去 喜 山
 蝸 涎 之 字 點 乾 峯
 地 影 角 于 沈 鏗 有
 送 以 也 物 竹 靴
 初 母 子 七 久 治 廣 考

天龍洞山 十

大高伊與寺 重成 一

有 竹紀

竹二山 和尚 十三

二階堂 安藏寺 一

妙讓 西堂 五

無極 和尚 七

永 山 和尚 二

極深 和尚 一

百力 七井大獲大失磨房 十一

上杉伊與寺 能重 三

高武義寺 師直 一

方外 和尚 三

菩提地

草岸 和尚 六

晦谷 和尚 四

吉先 一

長悅寺 一

善願國師 五

建仁 龍湫 和尚 二

鎧海 和尚 七

定乃濟

全

和福十一年十二月十五日

紹巴第多子母作和漢

夢ノ想之連句心 予此巻を知らぬ

有相少園を待宗庵主より 石鼎集と云

和漢連句の巻をうへてはてしなく御す

寛政十一年十月

和

Amato...
The...
The...

渡

○まはくあは登句

梅のふゆのさかき

雪まきまのつらき

月おのゝつらき

うらみまのつらき

梅枝のゆき

とほまのつらき

うらみまのつらき

八句目あしむ

里まきけあゝ入おのほつねとつねとつねとねまけて
植まのちりまき

木のこゝろとも風なまきつて舞くまねまき
志ほやく浦ねけつて十一句めは月もあはれ
しりまき

あはれまはつねにのほやと月もまきまき
あしむ

まきつては里まきあゝ入おのほつねとつねとつねとねまけて

あはれまはつねにのほやと月もまきまき

八句目あしむ

神のまきまきまきまきまきまきまきまき
あしむ

あしむ

あしむ

あしむ

竹

竹細きらゝる水もあはれきりしと付て又

心もゆるらばしをあはれきりしと付て又

山里はあはれきりしと付て又

しほらきりしと付て又

到ては後もあはれきりしと付て又

いと松風つらき花ちりしと付て

あけしむしよ花をちりしと付て

あはれきりしと付て

まはるるあはれきりしと付て

多彩なるあはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

あはれきりしと付て

月あふりかたに招きよきて

と花をまきかきし招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

波あふりかたに招きよきて

波あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

波あふりかたに招きよきて

波あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

野風あふりかたに招きよきて

よと夜よとあて付るや

引きて明ぬる初音の山とて付て

おあまの浦よりあたまらとてと付て

初音の山とてあまの山とて付て

真つうのふの保の松とて付て

くもるやあまの山とて付て

之保の松原のけとて付て

付てあまの山とて付て

あまの山とて付て

あまの山とて付て

寺つうのふの保の松とて付て

あまの山とて付て

別れつうのふの保の松とて付て

あまの山とて付て

あまの山とて付て

あまの山とて付て

あまの山とて付て

あまの山とて付て

あき振子ねして付明りともなうと
付る但舞もまた明りともなうと
あきね二つを一つしてつじとちり
つじ大切あり

粧ねぬ方とて

心いし年おつ

鏡の袖とてね夜もして鏡のもとの老と拍

髪のはらりとてエラく袖ももつね

とくし

おのほくもあつた水とてみのおいさな

つら

おのほくもあつた水とてみのおいさな

つらつらとて人々難うきと付ね

又おのほくもあつた水とてみのおいさな

つらつらとて人々難うきと付ね

又おのほくもあつた水とてみのおいさな

つらつらとて人々難うきと付ね

つらつらとて人々難うきと付ね

しきねのしきあはれは

月とてしきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきねのしきあはれは

月とてしきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

しきと清丹と云ふは

あはれなき娘も人さしはくさるる娘
かたじけなくあはれなき娘もあはれなき

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

あはれなき娘もあはれなき娘

気力條を動とて又あまの道なり
朽木朽物 甚くはるゝあきくまのまじり
朽木中草 けしきもあきよりけしき
秋のりばもけしき月まちて 秋乃思 寝るけしき
し月をまじりぬるあきくま

こそ打別の時をあらわす

秋のりばもけしき月まちて 秋乃思 寝るけしき

朽木中草 けしきもあきよりけしき

朽木朽物 甚くはるゝあきくまのまじり

気力條を動とて又あまの道なり

あまの道なり ちかやうのまじり せせつてしうもあき

るけしき けしきもあきよりけしき

朽木中草 けしきもあきよりけしき

朽木朽物 甚くはるゝあきくまのまじり

朽木中草 けしきもあきよりけしき

朽木朽物 甚くはるゝあきくまのまじり

朽木中草 けしきもあきよりけしき

朽木朽物 甚くはるゝあきくまのまじり

Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the right page of the open book. The text is written in dark ink and appears to be a signature or a short note.

後拾
梅の枝

若くはうらけに後拾よりらん
梅の枝はうらけに
梅の枝はうらけに
梅の枝はうらけに

雪の白の裾は

山類形して裾は連なり
裾は連なり
裾は連なり
裾は連なり

まろくは

まろくは
まろくは
まろくは
まろくは

まろくは

まろくは
まろくは
まろくは
まろくは

あり初は

あり初は
あり初は
あり初は
あり初は

彩形は

彩形は
彩形は
彩形は
彩形は

二葉は

二葉は
二葉は
二葉は
二葉は

白妙の梅は

白妙の梅は
白妙の梅は
白妙の梅は
白妙の梅は

白妙の梅は

白妙の梅は
白妙の梅は
白妙の梅は
白妙の梅は

梅

らもあしきく少くもあはれして
侍らむよ

そよ子ましく白じりあはれ梅を

侍らむよ
梅の白きく
侍らむよ

春の風

梅の香の面白きと催馬あふよ

くさくさ梅の香

侍らむよ
梅の香の面白きと催馬あふよ

いらあき風

侍らむよ
梅の香の面白きと催馬あふよ

まてんちてあはれ

侍らむよ
梅の香の面白きと催馬あふよ

古村本

まてんちてあはれ
梅の香の面白きと催馬あふよ

梅

らもあしきく少くおのれて
つから 待らむよ

そよ子ましく白じりあはし梅を

せよまきく... 梅の白...
侍にや なり 香 せり

春柳

柳の風の面白きと催馬あふりて

春風

古村本... 春風... 花のなきま吹...

春風

あはれそあはれそあはれそあはれそ
あはれそあはれそあはれそあはれそ

あはれそあはれそあはれそあはれそ
あはれそあはれそあはれそあはれそ

あはれそあはれそあはれそあはれそ
あはれそあはれそあはれそあはれそ

心切あはれや

風あはれ世に花もさき春の花

も深なる世の花もさき風もあはれ

心切あはれ 世に花もさき春の花
あはれ世に花もさき春の花

新もあはれ世に花もさき春の花

友山の弟 新もあはれ世に花もさき春の花
あはれ世に花もさき春の花

いふもあはれ世に花もさき春の花

まゝ一帯一帯の魚の斗い

花や一帯一帯の魚の斗い

心切あはれ 花や一帯一帯の魚の斗い

花のいふもあはれ世に花もさき春の花

心切あはれ 花のいふもあはれ世に花もさき春の花
あはれ世に花もさき春の花

花のいふもあはれ世に花もさき春の花

花のいふもあはれ世に花もさき春の花

花のいふもあはれ世に花もさき春の花

ら...の...
...
大切...
...
入る...

用...
...

秋風...
...
...
...
...

明...
...
...

春...
...

あ...
...

あ...の...
...

柳...
...

花...
...

...

思は、かへりて
このよのち
うきや海に用は
かへり見すへき事

風やしるしりてそね
柳

秋のそよよと
柳

ちよとよと
柳

柳
山むすし川原

秋とと花の
河

源は物借
源は物借

雨
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

花の初
花の初

月夜や春の空に彩霞のけ

侍るにや 月夜や春の空に彩霞のけ

白妙乃老也月乃天付袖

侍るにや 白妙乃老也月乃天付袖

神代ももろもろの月

侍るにや 神代ももろもろの月

月さゆく袖も井も流と浮

侍るにや 月さゆく袖も井も流と浮

石下のかげり捨山は秋の月

侍るにや 石下のかげり捨山は秋の月

山も夕暮るや秋の空

侍るにや 山も夕暮るや秋の空

例のさかしのものいんし

侍るにや 例のさかしのものいんし

例のさかしのものいんし

侍るにや 例のさかしのものいんし

しものいそ たま 山 本意 ありあきの命 くや あり 只 只 か

山 か 路 は ち は 越 ん 中 の 木

そ は 木 は ち は 越 ん 中 の 木

雁 さ 鳴 き け は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

時 の 雨 は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

は ら び は ち は 越 ん 中 の 木

木のくまてを

中はくまてす

しきもいさかき

神

廿月

侍らぬ

世

是木

色

同

送

ま

ま

色

此

お

お

お

お

侍らぬ

侍らぬ

みまふねんかまねねのこ

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

常柳春句下

みまふねんかまねね

あまふねんかまねねのこ

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

松の雪

松の雪

松の雪

松の雪

月夜にみまふねんかまねね

みまふねんかまねね

松の雪

松の雪

あまふねんかまねね

松の雪

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

あまふねんかまねね

こぼれおの精と死のうらみ

此の^{ほろ}ほろと死のうらみ

此の^{ほろ}ほろと死のうらみ

川多の^{ほろ}ほろと死のうらみ

川多の^{ほろ}ほろと死のうらみ

甲斐の^{ほろ}ほろと死のうらみ

甲斐の^{ほろ}ほろと死のうらみ

白雲の^{ほろ}ほろと死のうらみ

白雲の^{ほろ}ほろと死のうらみ

半粒の^{ほろ}ほろと死のうらみ

半粒の^{ほろ}ほろと死のうらみ

半粒の^{ほろ}ほろと死のうらみ

半粒の^{ほろ}ほろと死のうらみ

半粒の^{ほろ}ほろと死のうらみ

成心用

發句ハいつれもあつていふや

後後

西水

尾

院院

御

連

款

寛文六年霜月

法眼
玄依

敷法玉芝の如し

勅諭一書に依りて下不忌一不あり
祖回孫年毎唐唐一法一法不在なる

沈多唐一く一く一々答考
正祝町 寶豊

勅不足一不あり祖回芝の如のちふなる
沈の唐法依りて下不忌一不あり

水銀一々一々一法皇

法皇一々一々

新日... 新院

勅此句... 照了院

多道... 照了院

... 照了院

... 照了院

... 照了院

... 照了院

日野

都... 弘寶

勅... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

勅... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

... 弘寶

下五文の孝一のしるし。なる所を
勅書所の前より取りて名をす。新田五

夫

勅書所の前より取りて名をす。新田五
勅書所の前より取りて名をす。新田五
勅書所の前より取りて名をす。新田五

本とありしを今年も七月約形で形

何とすく志をあらわす。送還

此の一事も常事掾の中。中夜通夜

浦外に在りし形。仲一。通夜

此の一事も常事掾の中

字作形供や。勅書所。玄俊

身におす。おす。中夜通夜

勅書所の前より取りて名をす。新田五

勅書所の前より取りて名をす。新田五

勅書所の前より取りて名をす。新田五

後。勅書所。新田五

相の。勅書所。新田五

新田五

勅書所。新田五

龍田新編 湯白

川のほとり、深し、物多し、實者
多し、時毎、おし、さう、路の山、信、送る光

右日方

沈少、月、小、惜、の、災、難、
玄、俊

勅、字、路、子、て、ん、あ、あ、月、の、あ、く、た、れ、あ、木、惜

、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、

、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、

あ、く、た、れ、あ、木、惜

勅、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、
、字、路、子、あ、木、惜、あ、く、た、れ、あ、木、惜、

、字、路、子、あ、木、惜

龍田新編 湯白

其の事... 法皇

其の事... 法皇

勅... 法皇

其の事... 法皇

其の事... 法皇

其の事... 法皇

其の事... 法皇

其の事... 法皇

勅... 法皇

其の事... 法皇

勅... 法皇

其の事... 法皇

其の事... 法皇

勅... 法皇

其の事... 法皇

勅... 法皇

其の事... 法皇

勅... 法皇

其の事... 法皇

新

新と書くは、
勅在、おのり、
新と書くは、
勅在、おのり、
新と書くは、
勅在、おのり、

逢

逢と書くは、
勅在、おのり、
逢と書くは、
勅在、おのり、
逢と書くは、
勅在、おのり、

牙

牙と書くは、
勅在、おのり、
牙と書くは、
勅在、おのり、
牙と書くは、
勅在、おのり、

管

管と書くは、
勅在、おのり、
管と書くは、
勅在、おのり、
管と書くは、
勅在、おのり、

林

林と書くは、
勅在、おのり、
林と書くは、
勅在、おのり、
林と書くは、
勅在、おのり、

山

山と書くは、
勅在、おのり、
山と書くは、
勅在、おのり、
山と書くは、
勅在、おのり、

柳

柳と書くは、
勅在、おのり、
柳と書くは、
勅在、おのり、
柳と書くは、
勅在、おのり、

新

勅在、おのり、
勅在、おのり、
勅在、おのり、
勅在、おのり、

ふしと字ありて、たて横たすなり

仕へたる人もは、たて二日子 乃、たて是

たて時をすなり

形い、たてあつた、たて字の、たて形、たて信

時、たてと、たて告、たてる、たて籍、たての、たてあ、たてい、たて吉、たて俊

時、たてお、たて久、たてし、たて新、たて是、たてす、たてる、たて法、たて室

たて唐、たて和、たて色、たてく、たてた

新、たて信、たて毎、たて日、たて書、たてる、たて色、たて付、たてる、たて信、たて法、たて室

吉、たてし、たて宋、たてに、たて形、たての、たて書、たてる、たて信、たて法、たて室

法、たて皇、たて海、たて勺、たて二十

新、たて信、たて海、たて勺、たて十四

照、たてる、たて信、たて海、たて勺、たて十七

八、たて条、たて式、たて部、たて信、たて勺、たて一、たて勺

属、たて丸、たて次、たて信、たて勺、たて六

日、たて信、たて海、たて勺、たて一、たて九

宗長久菴居士傳

宗長居士傳

居士諱宗長字久菴號柴屋軒
以後花園院御宇文安五年戊
辰生于駿州島田邑鍛冶義助
子也稟賦聰敏有出群拔類之
氣象初受業於醍醐普捨院僧
某曰駿河宰相國至今川上總介義忠愛

之。近侍左右。十六歲。寬正四年。未。初謁于見外齋。宗祇。慕蘭新。針。筑波跡。晞顏。難波淺香道。鍊。磨習修。始向四十霜。無不隨逐。東。奧。西。陬。北。越南紀之行。十八歲。同。六年。乙酉。北。難。染。後。遂受戒。加行。灌頂。二十歲。應仁元年。丁亥。罹世。

騷擾。交兵馬塵。流洛十有餘年。三。十二歲。文明十二年。庚子。冬。十月。祇。羽。赴。多々良氏。政弘之佳招。遊防。州。山口縣。居士亦伴之。靈區奇踪。叔。拾吟。素。素。傾心於禪風。袒月沐。純。十。休之法。往來于城州。新邑。醉。恩。菴。紫野真珠菴。三十四歲。同。十二年。

辛丑冬十一月。下休遷化。居士哭而
勸之。是故每迎講辰必往。無不香
拜。其志可嘉尚矣。四十八歲。明應
四年乙卯。夏六月。新撰菟玳波集
成。居士句多載之。五十五歲。文龜二
年壬戌。七月晦日。宗祇自北越將
歸駿州。病路没于湯本。葬于定輪

寺。居士深哀惜之。作終焉記。事已
詳悉。故不贅之。每迨講景連句。無
不嗟悼。五十七歲。永正元年甲子。相
敬於泉谷。作紫屋軒。為休憇之所。
其致境也。倒山嶺橫峯。清流激湍。松
杉岑蔚。泉石嗒呀。觀音薩埵。堅坐
之地。行基大士建初之蹟也。勝人奇

士。每有經歷無不諮詢。同二年乙丑。
五十八歲晚產一女子。六十歲同四年丁
卯。產誕一男子。初齋。藤加賀守安
光養之爲子。後家慈香禪尼。能勢因
幡守源
賴則之撫育。使出家。居新心傳菴。承
詭喝食是也。六十四歲同八年辛
未。正月二十一日。懸河城主朝比奈

備中守泰熙不祿。號宗榮居士息泰能年
最少。伯父在京亮泰以誘掖之。素與
居士締交。殆軼等倫。是故連哀悼
句。六十九歲同十二年丙子二月。近
江人中江土左守藤原貞繼於月村
齋宗碩。有十花十句。七十歲同
十四年丁丑臘月。作宇津記。七十

五歲大永二年壬午八月於執州山
田爲管領細川右京兆源高國與月
村有法樂十句七十七歲同四年甲申
正月列管領雅筵有一日十句又
有聽雪翁月村齋與居士之吟十句
二月爲朝倉教景依一萃桂月舟
請養鷹鳥記七十八歲同五年乙酉

八月念眞追慕豐雅樂頭統秋一
周諱景作十首和歌聽雪翁亦親
書自我偈後冠妙法蓮華經五字於
十首和歌相俱悼之七十九同六年
丙戌正月廿六日龍寶山大德寺山門
再建立柱居士初募緣竭力捨財
粥鬻以源氏物語是歲二月再修

葺柴屋。庭湛池水。砌擁竹籬。中間
立石。植杉移梅。削松樹三尺許。題
和歌以答徑句。夏六月二十三日。余川
匠作氏親卒。號增善居士時在酹恩
菴。七月訃至。不堪感慨。初願忌間
營辦小齋。供養香湯。至若憑于
聽雪。公羽請芬陀利經二十八品。和

歌於諸名家。資薦冥福。令嗣源氏輝
賜書感之。是歲十月。述老懷和歌十
首。聽雪翁亦同賦之。同月使宗信
侍者。摸寫一休和尚佩朱刀肖像。請于
等。浚倫。號聿俾書自贊語。以為一幀。
曾請于聽雪公羽親筆古今集八九
年于茲。竟愜素望。與古今心法口

授等。盛一瓶。呈之源氏輝。八十歲。同七年。丁亥七月。還于紫屋。報諫草於朝。比奈泰以八十一歲。亭祿元年戊子三月六日。以壽終。紫屋谷宗牧連句悼之。後以宗長遺意。鎌倉福山之側天源菴岩下。以石設墓誌。今存祖堂之傍。而青苔封之。睦夫居士爲人。溫粹和

煦。慈愛信義。我不忘本。根無捨故。舊枯淡空寂。招搖自適。傳和歌道士林所崇。杖屨所至。吟嘯遣懷。常嗜尺八。初號老人。後稱舊友。吹無生一曲。則頓除老病。洒洒落落。有時遊東山。謁于常菴。用舟湘雪。諸大老于和漢。于漢和抒其情。素可謂一代偉人也。爾思連歌也。參禪也。到

其悟入則連歌之外無參禪。々々之外無
連歌。是以遵遊自然之勢。恬淡無爲
之場。居士平居也。倚書窓。則藁竹簾。揮
笠掛壁間。堪顯隱情。坐吟榻。則蘿月
松風繞砌下。足弄禪味。北米圃築後。瀑
泉流前。其樂陶々。可謂一代偉人也。如
其事實。自壬午迄丁酉。有手記在。

昔日稱連歌七子者。種玉示祇聽雪實隆夢

菴月宗碩村耕第載孤竹宗牧柴屋是也。不才丙午

夏六月望。自米武歸浪華。路過柴

屋寺。住持圃公座之。傾葦情舊。相

語嘆無記。居士之履歷。是故探索

遺稿。遂述其際。而爲之傳。猶且使

山本素程摸其肖像。遠投柴屋。拜具

曰胸襟雪月絕纖塵。吟盡東西
南北春。憑几到頭成底事。蒼顏
白髮一閑人。

寬文以稔龍輯戊申三月六日
居士没後百四十二年諱辰

加松子福住道祐嘉謹記于浪華竹
溪軒下

鎌倉建長寺乙源菴在之
宗長居士墓

享祿元戊子年三月六日

宗長父菴隱士

掉石高サ二尺七寸程イキイシ

中段丸ノイキイシ敷石二枚二尺四方斗

石塔ノ階銀杏ノ大木アリ

袒師堂石カヘバ左ノ方ニアリ

山通大徳國師

同位牌

宗長久菴隱士

享禘元年戊子二月六日

裏

宗祇門弟駿州島田之人父義我助以巧治
為業父亡而拾世逃世後住于山州新里
聽法一休和尚後尋駿州宇都谷之山
中結茅住号柴屋軒晚年未于天源菴
卒行年八十一歲

己酉菴什物宗長法師遺像

之類

長也嗣

稱連歌僊

北山斗馳

編輯與

批柴屋月

抹北新里煙

仙太急風

矣之一休禪

遺吟熟滿

涿痾温泉

託高斯地

墓石儼然

隱士宗長久菴之古影一燈

高野氏函山使畫工寫之寄附

天源因以數語贊之

時之祿中二春之月初六

前建長現住天源夫顯陀龍室湛也

古傳記墓所位牌遺儀

寛政八年四月中村權成法師 鎌倉子

莊院之墓 天源寺 現住紹甸師子

古傳記

寛政八年

五月二十三日

章甫



